

## もくじ

▽大会案内	.....	14
▽大会報告	.....	14
▽受賞者のことば	.....	15
▽研究満喫	.....	19
▽ from Editors	.....	20

### 【大会案内】

#### 第74回大会のご案内(第2報)

大会長 小林宏光  
(石川県立看護大学)

来る2016年10月22日(土)・23日(日)に、石川県・和倉温泉で開催される日本生理人類学会第74回大会についてお知らせします。

7月末に大会HPを更新しました。演題・参加申込日程や和倉までの交通の詳細な時刻表など追加しております。以下のURLでご確認下さい。

<http://jspa.net/congress74.2>

大会内容について概略をご紹介します。10月22日(土)には石川県立看護大学前学長・日本人類学会元会長である木村 賛<sup>たすく</sup>先生による特別講演「ヒトにおける二足歩行の意義」があります。加えて2つのシンポジウム「遺伝学を通してヒトを理解する」(22日)、「看護学と生理人類学の接点」(23日)を企画しております。

肝心の懇親会は22日夕方から会場近隣の観光旅館である宿守屋寿苑で開催いたします。

演題申込は9月5日(月)まで、抄録提出および参加申込(発表無し)は9月30日(金)となっております。多くのご参加、ご発表をお待ちしております。



会場：和倉温泉観光会館

### 【大会報告】

#### 第73回大会終了報告

大会長 岡田 明  
(大阪市立大学)

第73回大会は、2016年6月4日(土)から5日(日)にかけて大阪市立大学学術情報総合センターを会場として開かれました。昨年秋は第12回国際生理人類学会議が日本で開催されたことから、全国大会としては同年5月に札幌で開催されて以来、約1年ぶりとなりました。おかげ様で全国から150名以上の方々にご参加いただき、盛会のうちに終わることができました。

この大会では、一般演題の他に、特別講演とシンポジウム、そして懇親会が行われ、その内容構成は近年の大会と変わるものではありませんが、それらの企画にあたり大会実行委員会にて様々検討いたしました。

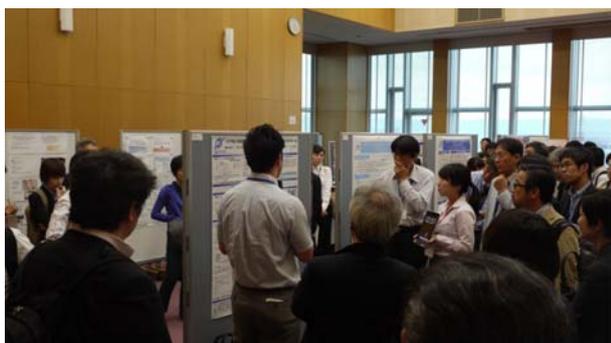
まず1日目の特別講演については、これまでの生理人類学分野ではあまり触れられることのなかったテーマ(しかし生理人類学でも重要となり得るテーマ)を模索するための議論がなされました。その過程で“ロボット”がキーワードとして挙がりました。特に介護や癒し等の対象としてのロボットとの関わりの中でことさら人の理解が重要となってくるからです。そこで、アンドロイドの開発を通じて人の理解を追及されている大阪大学の石黒 浩先生をお招きすることになりました。ア



特別講演「人間型ロボットと未来社会」(講師：石黒 浩先生)にて



懇親会にて



ポスター発表にて

ンドロイド開発という生理人類学とは異なる視点から人を見つめることで、あらためて“ヒトとは何か”を追究する生理人類学に携わる研究者の方々への新たな刺激となればと企画した次第です。異なる分野からのお話をいただくので少し不安もありましたが、ご講演は生理人類学にも共通する内容で大変面白く、多くの参加者の高い評価をいただくことができました。その後の懇親会にも参加していただき、石黒先生と直接議論を希望する参加者が終始絶えませんでした。

続く2日目には生理人類学をより身近に捉えることをコンセプトとした“健康と生活科学”というテーマのシンポジウムを企画しました。本大会の実行委員のほとんどが生活科学研究科に所属していたこともあり、疲労や健康寿命の課題を通じて、より生活に密着した面での生理人類学を考えるきっかけとなればと考えました。また、これまでの大会の多くが2つのシンポジウムを設定していたのに対し、今回は敢えてひとつに絞り、じっくり時間をかけることにいたしました。昼休みを挟み全体を第I部と第II部に分け、第I部では疲

労と健康をサブテーマに、その研究の第一人者である大阪市立大学医学研究科の梶本修身先生に最新の疲労研究について、そしてITを用いた応用面からエコナビスタ株式会社の安井輝訓先生とソフトバンク株式会社の石田雄太先生にそれぞれお話をいただきました。続く第II部では健康寿命をサブテーマとして、大阪市立大学都市健康・スポーツ研究センターの岡崎和伸先生にスポーツの面から、そして長崎女子短期大学の草野洋介先生に医学的立場からお話をいただきました。最後の総合討論は時間を十分とったつもりでしたが、それでも議論が十分尽せず終わった感もあります。しかし、その後生理人類学会誌編集委員会からお話があり、このシンポジウムの内容は特集記事として組まれることになりました。

さらにこの学会の大会の目玉のひとつは懇親会にあります。1日目の夜に会場と同じ建物内で行われました。こちらも学会参加者の4人中3人以上が参加するという盛況ぶりでした。本来イタリアンレストランなのですが、全国から参加者が集まるということで、特別に大阪名物の料理をシェフにお願いしました。その場でつくるたこ焼、二度づけ禁止の串カツなどは大変好評でした。

そして次回大会での再会を約束して、本大会は無事終了いたしました。

最後にこの場をお借りして、本大会の企画や準備に関わっていただいた諸先生方、大会スタッフとしてご協力いただいた学生諸君、そして大会にて研究発表や議論に参加していただいた皆様方に、あらためて御礼を申し上げます。



学会各賞を受賞した方々(左から元村氏, 志村氏, 小林氏, 勝浦会長, 岩永氏, 小崎氏)

## 【受賞者のことば】

### 学会賞

#### 2015 年度日本生理人類学会賞を受賞して

岩永光一(千葉大学)

この度、栄えある日本生理人類学会賞を賜りました。これも、ひとえに勝浦哲夫会長はじめ歴代の会長・副会長・理事、会員の諸先生方のご指導とご鞭撻の賜物であり、心より御礼申し上げます。

私は、千葉大学に着任してから今日までの 21 年間、幹事(総務)、理事(渉外、財務、総務)、そして現在の副会長と、日本生理人類学会の運営に関わる機会を頂いてきました。また、2010 年 10 月には大会長として第 63 回大会を千葉大学西千葉キャンパスで開催させていただきました。このように、長年にわたって学会との密接な関係を維持することができたのは、私にとって大変幸運なことであつたと考えています。さまざまな機会に多くの皆様と一緒に仕事ができただことは、大変有益で貴重な経験であつたことは言うまでもありません。しかし、学会活動であれば何でもよかったのかというと、そういう訳ではありません。それが生理人類学であつたと言うことが、大きな意味を持っていたのです。特に、5 つのキーワードに関する議論を通して生理人類学の本質について考える機会に参加できたことは、まさに僥倖の極みであつたと言えます。そのような機会を通して、ヒトの純粋科学としての方法論を探究し、純粋科学としての社会貢献のあり方を考えることは、ま

さに生理人類学的思考の醍醐味であると考えられるようになりました。このような経験ができたのも、それが日本生理人類学会だったからだと断言することができます。ただし、私個人としてはまだまだ道半ばです。今回の受賞を機に、さらに精進したいと気持ちを新たにしています。

日本生理人類学会の創設は、1978 年 11 月の生理人類学懇話会の設立に遡ります。その時、私はちょうど 20 歳の大学 2 年生で、前学会長の佐藤方彦先生の講義を受けながら、大学生々生活を満喫しておりました。それから 38 年という年月が過ぎようとしています。2 年後には学会創立 40 周年とともに、私も満 60 歳の還暦を迎えることとなります。40 周年のお祝いの会が、今から楽しみです。今後は、これからの日本生理人類学会を支え大きく羽ばたいてくれるであろう若い世代の先生方に、すこしでもお役に立てるような存在になりたいと考えています。

この度は、誠にありがとうございました。

### 論文大賞

#### 心拍変動研究のこれまでとこれから

小林宏光(石川県立看護大学)

この度は日本生理人類学会・論文大賞という大変な賞を頂き、共同研究者並びに学会の皆様へ深く感謝を申し上げます。この賞はこれまでの心拍

変動解析を中心とした一連の研究を評価して頂いたものと考えております。

しばらく前の話ですが、近所のガソリンスタンドでタイヤ交換することになりました。そこで店員さんが「うちでは今これがおすすめなんですけど」と B 社のタイヤのパンフレットを持ってきたのですが、驚いたことに、そこには心拍変動を用いた実験結果が示されていました。この新商品と従来のタイヤを比較したときに、新商品の方が運転中のドライバーの LF/HF が低い（相対的に副交感神経優位）という結果です。ちなみに、これは通常の運転ではなく、テストコースで路面に水をまいた滑りやすい状態でスラローム走行のようなことをやっているのです。タイヤによる差が自律神経反応に現れてもそれほど眉唾な結果ではないと思います。結局、これも何かの縁と思い、ちょっと高かったのですがそのタイヤを買いました。しかし、学生時代に心拍変動の研究を始めて 30 年近くたちましたが、ガソリンスタンドのお兄ちゃんから LF/HF の説明を受ける日が来ようとは、何とも感慨深く思いました。

自分がこの心拍変動の研究を始めた頃は、測定・分析の機器やソフトウェアも手作りで始めなければなりませんでした。近年は測定・分析がパッケージになったシステムが数多く販売されており、手軽にこの測定ができるようになりました。それどころか、最近ではスマホ用の心拍変動アプリが多数公表されており、周波数解析をしたり、中には呼吸誘導の機能までついているものまであります。

このように、心拍変動の測定・解析は学術的な研究以外にまで広く普及したのは事実ですが、一方でかつてのような目新しさは全く失われてしまいました。ちなみに B 社の HP を見ると、今では心拍変動の結果は示されておらず、脳波データをもとにしたストレス評価に入れ替わっています。ただ、測定指標としての有用性がなくなったわけではありませんし、研究されるべき点も残されていると思います。最近では心拍変動以外の研究もいくつか発表しておるのですが、今回の受賞もあり、もうしばらくこの方向の研究を続けていきたいと考えております。

---

---

## 優秀論文賞

### 優秀論文賞(英文誌)を受賞して

北村真吾(国立精神・神経医療研究センター)

---

---

このたびは、名誉ある優秀論文賞を賜り大変光栄に存じます。当該論文「Association between delayed bedtime and sleep-related problems among community-dwelling 2-year-old children in Japan」(Journal of Physiological Anthropology, 34:12)は、西東京市に出生した 2 歳児を対象として、就床時刻の遅れと就床時・起床時の睡眠問題との関連を調べたものです。

養育者の社会的スケジュールに合わせて起床時刻を決定されてしまう遅寝児では、代償性の長い午睡がみられますが、過剰な午睡は睡眠圧を減弱させ、就床時間帯における睡眠傾向の低下による遅寝の再現と睡眠不足を固定化させ種々の睡眠問題を惹起する危険性があります。本研究では、地域在住の 2 歳児を対象に遅寝児における睡眠習慣と就床時・起床時の睡眠問題の関係を明らかにすることを目的としました。

本研究の結果、2 歳時点においても就床時刻と夜間睡眠時間、午睡時間に大きな個人差が生じていることが明らかになりました。短時間睡眠は遅寝児で顕著であり、同時に就床抵抗、覚醒困難など種々の睡眠問題が高頻度に認められましたが、遅寝児では睡眠不足がより早い就床や入眠に結びついておらず、遅寝児では午睡の延長による睡眠負債の代償が更なる遅寝の惹起を生じている可能性が示唆されました。一方、睡眠時間や昼寝時間を調整したモデルでも、遅寝そのものが依然として 3 倍から 6 倍も高いオッズ比として示されたことから、生体リズム位相が後退していると考えられる夜型児童では睡眠不足とは独立して就床抵抗、覚醒困難など種々の睡眠問題が持続している可能性が示唆されました。本研究の知見は、睡眠問題が見られる幼児には、午睡や就床時刻等の睡眠習慣の改善や時間生物学的素因の個人差も考慮した個別指導の必要性を強く要請するものと考えます。

今回の論文は当センター児童・思春期精神保健研究部の神尾陽子先生、精神生理研究部の三島和夫先生らのご尽力によって実現された厚生労働科学研究の一部です。調査の実施から論文執筆に至

るまでご指導，ご支援いただいた神尾先生，三島先生を始め両部の先生方に篤くお礼申し上げます。これからも生理人類学の領域に貢献する研究ができるよう努めて参ります。

---

---

### 論文奨励賞

#### 日本生理人類学会論文奨励賞を受賞して

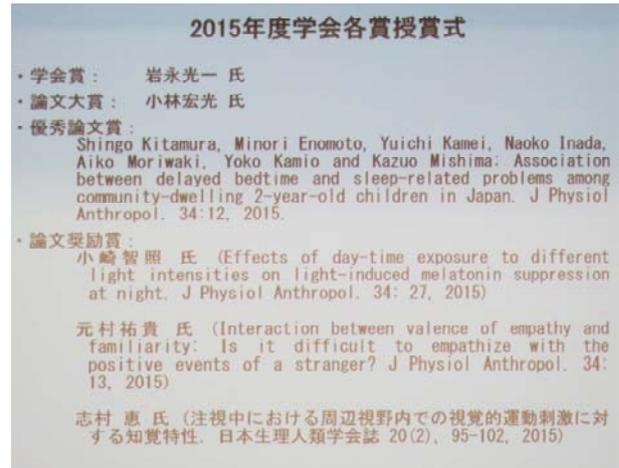
小崎智照(九州大学)

---

---

第 73 回日本生理人類学会大会にて本学会の英文誌「Journal of Physiological Anthropology」に掲載された論文「Effects of day-time exposure to different light intensities on light-induced melatonin suppression at night」に対して日本生理人類学会論文奨励賞を頂きました。まずは，本論文を推薦していただきました英文編集委員会の先生方，それに奨励賞へ選定いただきました選考委員会の先生方に御礼申し上げます。本論文は，一般家庭の照明を想定した夜間光によるメラトニン分泌抑制をどの程度の日中の光強度で軽減できるのかを検証したものです。蛍光灯のような青白く明るい夜間照明はメラトニンの分泌を抑制し，高い乳ガン発生率などの健康リスクを高めることが指摘されています。しかし，現代社会から夜間照明をなくすことは不可能です。これまでの研究で日中に強い光へ曝された場合には，夜間光によるメラトニン分泌抑制作用の軽減が明らかとなっていました。これは日中に十分な光に曝されていれば，夜間光に多少曝されても健康リスクを高めないことを示唆するものです。つまり，ヒトが概日リズム系の恒常性を保ち，健康を維持するには昼間の光と夜間の光の作用バランスを明らかにすることが重要となります。本論文ではこの作用バランスの理解につながるデータを示したことが評価され，今回の奨励賞をいただけたのではないかと思います。

今回のデータは，私が九州大学に着任し，研究費を獲得し，初めて私自身の研究室を立ち上げ，研究室の学生と共に得たものです。九州大学に着任する前までは恩師である九州大学の安河内先生の保護のもとで研究を行って参りました。そのため，これまで本雑誌に掲載していただいた論文は



第 73 回大会時に行われた授賞式のスクリン

全て「Kozaki and Yasukouchi」の連名でありました。しかし，今回，初めて連名者に「Yasukouchi」の名が無く，やっと独り立ちできたと思っております。しかも，今回奨励賞をいただくことができ，少しは安河内先生への御恩返しのできたのではと思っております。今後は優秀論文賞や論文大賞がいただけるように，これまで以上に研究を励みたいと思います。最後になりますが，本研究を一緒に行ってくれた本研究室の学生達，それにこれまでご指導いただきました安河内先生に厚く御礼申し上げます。

---

---

### 論文奨励賞

#### 共感の生理人類学的意義・脳活動からのアプローチ 元村祐貴(国立精神・神経医療研究センター)

---

---

前回の日本生理人類学会第 72 回大会にて発表奨励賞をいただいたばかりなのですが，今度は論文奨励賞をもいただきましたことに驚きを感じるとともに，誠に光榮に存じております。偶然にも大会での発表と同じテーマで論文賞をいただくことができ，自分の研究の方向性が間違っていなかったと，嬉しく感じております。本研究はヒトの共感とそれに関連する脳波活動がその相手によって変化することを示した研究であり，内集団と外集団という他者の枠組みが社会的認知に大きな影響を与えることを示唆しています。ヒト脳の進化に，集団形成による他者との相互作用が大きな影

響を与えたことが示唆されており、今後の生理人類学研究の中でも重要なトピックになるものと考えております。

この論文は九州大学修士課程に在学していたころのデータを再解析し投稿したものです。博士課程を卒業してから過去のデータに触れると、修士のころには思いつかなかった解析法やアイデアが生まれ、興味深い研究となりうることを実感し、自己研鑽の重要性を再認識いたしました。さらに、私自身が **corresponding author** となった初の論文でもあり、レビュアーやエディターとのやり取りを通じて、学術活動の本筋に少し触れることができたのではないかと感じております。

現在は国立精神・精神医療研究センターにて **MRI** を用いて睡眠にかかわる研究を行っており、脳波を用いた研究や、共感というテーマから離れてはいるのですが、いずれまた再開すべき重要なテーマであると考えております。

最後に、修士時代にご指導いただきました綿貫茂喜先生、および東京から福岡の遠隔操作で解析をお手伝いしてくれた綿貫研究室の後輩たち、論文出版に携わっていただいた全ての方々に心より感謝申し上げます。いただいた賞を励みに、今後ともよりよい研究ができますよう努めてまいります。

---

---

### 論文奨励賞

#### 生理人類学的視点と医療

志村 恵((株)セントラルユニ)

---

---

この度は平成 27 年度日本生理人類学会論文奨励賞という名誉ある賞を賜りまして、大変光栄に思います。ご選考いただきました学会関係者各位には、心より感謝を申し上げます。

賞を頂きました論文(日本生理人類学会誌 20 巻 2 号掲載)は、周辺視の運動刺激に対する知覚特性についての研究です。実験では、周辺視に単振動する刺激を呈示し、各振動周波数・各方位角における正答率を算出しました。結果は、下半視野で低周波数振動刺激への正答率が高い傾向が見られました。ヒトの視覚は上下で異なる機能特性を有していることが知られており、これは二足歩

行により、下半視野を手での作業に関する処理に費やしてきた歴史に由来しております。今回の結果より、下半視野は低時空間周波数の刺激の感受に優れていることが示唆されました。

本研究は、共著者でもあります日立アロカメディカル鈴木様より、モニターの視認性というテーマを頂いて行った共同研究です。実際に病院を訪れヒアリングをしたり、他テーマの実験にも参加したりと、医療現場に近い所で研究を進めておりました。それらは、生理人類学的な視点を医療に取り入れるきっかけになりました。現在、私は医療系メーカーに所属しており、病院の環境作りに携わる立場におります。会社での研修でも病院を訪れる機会が多くありましたが、院内環境は決して完璧ではなく、多くの制限と、それに対するスタッフの“慣れ”で回っている印象を受けました。人体に影響を及ぼす機器も多く、それらを操作するのもまた人であります。研修や業務を通して、医療スタッフが快適に働ける環境作りの一つのよりどころとなり得るのが生理人類学だと感じ、今後も継続して学び続けていこうと考えております。

また本研究は学部の卒業論文でもありました。初めて多くの論文に触れ、実験や考察を自ら考えた思い入れが強い研究です。そんな未熟な研究を、論文として発表できるまで根気強くご指導頂きました勝浦先生(千葉大学)、下村先生(千葉大学)には深く感謝申し上げます。今回の受賞を糧に、ヒトにとってより良い環境・製品の開発ができるよう、尽力していく所存です。



#### 【研究満喫】

#### 学位取得記

小原久未子(神戸大学)

本年 3 月に神戸大学大学院を修了し、博士(学術)を取得しました。学部 3 年生から 7 年間にわたって、指導教員としていつも温かくご指導くださいました中村晴信先生には感謝してもきれません。この場をお借りしまして学位取得記として報告させていただきます。

博士学位論文は、「現代社会における女性のストレスとそれに及ぼす食事制限の効果」と題して、疫学・実験の両面からアプローチを行い、現代社会において女性が抱えるストレスとそれに対して食事制限が及ぼす効果を検証することを目的として研究を行いました。

自然環境下にある狩猟採集社会とは異なり、現代社会は人工環境下にある高度文明化社会であるため、自然環境に適応的であるヒトにとって、現代の文明社会から受けるテクノストレスは、男女を問わず問題となっています。なかでも現代社会における女性に特有の問題として、不適切なボディイメージへの関心や過剰なやせ願望、またそれらによって引き起こされる食行動の乱れなどがあります。さらに、女性には月経周期があり、それに伴う随伴症状は、女性にとってストレスをもたらし、女性の健康を損なう要因ともなっています。これら、女性に対してストレスを与えるものに対し、ストレスの軽減をもたらす手段として、食行動の変容を取り上げ、報告しました。食行動とストレスの軽減に関しては、これまで男性においては検証された報告がありますが、女性に対して月経周期を考慮した報告は不十分であったことから、この研究を進めてきました。しかしながら、他大学に比べると研究設備が整っているとはお世辞にも言えない環境でしたので、実験室を作り上げるところから始めなければならず、大変苦労しました。家具屋で実験用の椅子、ホームセンターでカーペットを買ってきて設置したり、温湿度の管理のために加湿器やファンヒーターを細かく調整したりと手作り感満載の実験室でしたが、被験者の方々に「家にいるような安心感があり、リラックスできる」「実験室と聞くと緊張するけどここはそんなことがない」などと言っていたときには頑張ってセティングした甲斐があったなあとうれしくなることもありました。この研究結果の一部を ICPA2015 で発表したところ、Best Student Poster Award をいただくことができ、今後もより一層頑張って研究をしていこうという気持ちになれました。

学会内では、若手の会において7代目の高橋会長時代に関西幹事、8代目の本井会長時代に副会長、現在は9代目元村会長の下で委員として、関西奨励発表会や夏期セミナーの運営などに関わっ

て活動をしてきました。また、71回大会においては、無謀にも(?)大学院生での事務局長を務めさせていただきました。現在大会担当理事で71回大会副大会長でもある小崎智照先生の御助言をいただきながら、大会長の中村先生と二人三脚で全ての仕事の企画立案から実働まで行い、無事大会が終了したときには、これまでにない達成感を味わうことができました。いずれの運営においても雑用の数はとんでもないもので、研究室全体で研究がストップしたこともありましたが(笑)、大変貴重な経験をさせていただいたと思っています。

これからも研究成果の発表や、日本生理人類学会の発展に少しでも貢献できるよう頑張りますので、今後ともご指導ご鞭撻くださいますようよろしく願いいたします。



#### from Editors

次号 No.4 の原稿締切は 2016 年 11 月 1 日です

▽9月も残暑が続きそうですが、皆様、如何お過ごしでしょうか？今号では先の第73回大阪市立大学大会にて学会各賞を受賞された方々から沢山のコメントを頂きました。この場を借りてお礼申し上げます。次号は企画記事をお楽しみ頂きたいと思います。(安陪)

▽今号のレイアウト作業はリオ・オリンピック開幕の頃に行っています。連日の猛暑です。スコールのようなゲリラ豪雨があちこちで発生し、日本が東南アジア化しつつあるという指摘も耳にします。そんな気候に身体がなかなか馴染みません。今号がみなさまのお手元に届く頃には、少しは秋の気配が感じられるようになっていけばよいのですが。(仲村)

#### ▽PANews 編集事務局

安陪大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター  
仲村匡司 京都大学大学院 農学研究科  
メールアドレス [panews@jspa.net](mailto:panews@jspa.net)  
※原稿、お問い合わせなどはこのメールアドレス宛にお送りください。